

2018年度 社会学部優秀論文賞（安田賞）講評

選考委員代表 野瀬 正治

2018年度に安田賞候補論文として推薦された卒業論文は9篇で、分野は、民族、宗教、社会心理、介護、ジェンダー、産業、ナショナリズム、表象など多様でありました。これらについて6名の選考委員が、1991年理事会決定「規定」および2011年社会学部「覚書」に基づいて審査を行い、最優秀論文1篇、優秀論文3篇を選考致しました。

最優秀論文は、川路瑞紀さん（島村ゼミ）「廃仏毀釈のゆくえ——鹿児島県日置市「妙円寺詣り」の事例」、優秀論文は、水野景子さん（清水ゼミ）「人はなぜ罰が存在している公共財ゲームにおいて非協力をするのか——確率的に罰がある状況での非協力と損失の確率価値割引」、宇井堅登さん（今井ゼミ）「認知症患者と社会との繋がり——認知症カフェを通じて」、そして山川姫加さん（阿部ゼミ）「ナショナリズムとアスリートの『物語化』」でした。

最優秀論文賞の「廃仏毀釈のゆくえ——鹿児島県日置市『妙円寺詣り』の事例」は、日本人の宗教観の特徴を、明治維新当時の廃仏毀釈や神仏習合から現在へのほぼ一世半の連続した中で、実際に現地に足を運び、祭りにおける人々の行動を観察し、寺社や市役所の関係者にもインタビューするなど多くの資料やインタビューをとおして「人々の心の中では神と仏が矛盾なく並存している現実を描き出した」、50ページを超える力作でした。着眼点と構成の明確さおよび明快な記述により民俗や今日的なテーマとしての日本人の宗教と行動の特徴について、一次資料の収集と厚い描写により鮮明に浮かび上がらせており、大変優れたものがあると評価されました。

論文の概要は、鹿児島県日置市の妙円寺において近世期から行なわれてきた「妙円寺詣り」という祭礼が、廃仏毀釈運動による妙円寺の廃寺、そしてその妙円寺に代わる徳重神社の創設により同神社の祭礼とされたが、その後、信教自由化によって妙円寺が復興したにも拘わらず、この「妙円寺詣り」が現在まで徳重神社に向けて行なわれているという事例をつぶさに記述、検証し、そして現在の妙円寺、徳重神社、日置市当局の3者それぞれの言い分を精緻な調査、分析により日本人の宗教の特徴を明らかにしています。すなわち、明治維新の神仏分離令からほぼ一世半、そして戦後、信教の自由化を経た今日でも、日本では人々の心の中に、神と仏が矛盾なく並存している現実、日本の宗教のあり方の特徴を丹念な調査と記述で浮かび上がらせています。具体的には、関ヶ原の戦いの「鳥津の退き口」（いわゆる敵中突破）で有名な鳥津義弘の供養が近世期においては菩提寺の妙円寺でなされ文字通り「妙円寺詣り」がなされていたが、明治維新の廃仏毀釈によって鳥津義弘の木像が徳重神社のご神体になりその後の信教の自由化によっても妙円寺に帰ることなく徳重神社のご神体として現在も矛盾なく並存するとともに、いわゆる「妙円寺詣り」も徳重神社に詣でる、といった複雑な状況を丹念な調査と記述により、日本的宗教のあり方について現在に続く神仏習合の事例として明らかにしています。また、過去に薩摩では郷中教育として発展していた二才教育いわゆる青年世代の教育の一環としての夜中の行軍演習としての精神教育としても「妙円寺詣り」が根付いていた点も克明に記述しています。

今日、日本に限らず、政治と宗教の関係、および宗教と教育の問題は、世界各国、各地域においてそれぞれの特徴を持って議論や問題となっていますが、この論文では、過去において神仏分離や教育が日本的に進行していくなかで今日の日本の特徴がどのように形成されたかを、当初は鳥津義弘の遺訓を称える菩提寺の「妙円寺詣り」に始まった祭礼が、二才いわゆる青年への郷中教育に結び付くとともに、明治維新政府による神仏分離令と廃仏毀釈により政教一致の明治維新政府の施策の下、新たな展開をし、一

方、日本的な神仏習合として鹿児島県日置市において矛盾なく浸透している状況を、豊富な資料とインタビューにより 50 ページを超える論文として明らかにしている点が高く評価されました。

優秀論文は 3 篇です。水野景子さん（清水ゼミ）の「人はなぜ罰が存在している公共財ゲームにおいて非協力をするのか——確率的に罰がある状況での非協力と損失の確率価値割引」は、社会的ジレンマ状況における協力の問題に対して、確率価値割引がいかに影響しているかを明らかにした論文です。すなわち、罰が確率的に与えられる状況において協力の程度がどのように変わるか、つまり、非協力行動は必ず発見されるわけではなく、また発見されても必ず罰せられるわけではない状況下で非協力行動がどのように変わるか、について研究したものです。結論では、損失の確率価値割引率が大きい個人ほど多く非協力をを選択することや、確率価値割引率が非協力率に与える影響は、低確率で罰が与えられる条件のほうが、高確率で罰が与えられる条件より大きいことなど、確率価値割引率の大きさに応じて非協力行動が変化することを明らかにしています。このメカニズムを綿密な実験室実験によって実証した点、また、多くの英語論文の引用や価値割引のモデリングによる解析を行うなど、優れた論文と評価されました。

また、宇井堅登さん（今井ゼミ）の「認知症患者と社会との繋がり——認知症カフェを通じて」は、認知症を取り巻く社会的背景の考察、先行研究の十分な検討を踏まえて、認知症カフェ・カフェオレンジ浪漫でのボランティアとしての参与観察、およびカフェオレンジ浪漫を運営する介護士および介護士資格を持たない認知症カフェに携わっているボランティアらへのインタビュー調査などを通しての自己の分析・考察により、特に認知症患者自身の自己のあり方や、ピアサポートの概念からの考察を通して、認知症カフェのように認知症という同じ苦しみを持つ人たちがいる環境だからこそ、ありのままの自分やそれ以上の普段とは違った自分をさらけ出すことができ当事者らに強く影響を与えること、を明らかにした点は優れており、日本では一般化しているデイケアやデイサービスのあり方およびまだ日本ではあまり普及していない認知症カフェのあり方にも一石を投じています。本論文は、認知症患者等と社会、地域等との繋がりについて通説を超えた指摘であり優れた論文と評価されました。

山川姫加さん（阿部ゼミ）の「ナショナリズムとアスリートの『物語化』」は、これまでのナショナリズム化とメディア表象分析における研究動向を踏まえて、陸上競技部のマネージャーとしての筆者が多田修平選手のメディアでの取り上げられ方に疑問を感じ、すなわち、スポーツおよび選手が、メディアによって過剰に描かれる「物語化」と「ナショナリズム化」により大きく影響を受けていることに、なぜそうしたことが起きるのかや、グローバル化時代において新たな問題が潜んでいることを、多田修平選手に加え、駅伝選手、甲子園出場の野球選手の事例、そして「ハーフのアスリートの活躍」等を通して論じたものであります。筆者が言及するように、メディア、観客だけでなくアスリート自身も「物語化」に囚われ、「物語化」の犠牲になっていること、また、ハーフのアスリートに求められる「物語」は、「存在証明」という概念、すなわち、その集団からの承認のため、ここでは「日本人らしさ」を物語化に秘めさせることで、その危うさを指摘しているなど、東京五輪が近づく今日、メディアにより、同様な事象が今後ますます取り上げられると思われ、筆者の考察は優れていると評価されました。

ここで紹介させて頂いた論文は、以上 4 篇ですが、安田賞候補論文として推薦された卒業論文 9 篇、いずれも、問題設定が鋭く、資料・データの収集・整理においても学術的努力が払われ、新しい発見や提案に至っており、優れた論文でした。各論文執筆者およびご指導に当たられた教員の方々に敬意を表します。

最優秀論文	卒業論文名
川路 瑞紀 (島村恭則ゼミ)	廃仏毀釈のゆくえ ——鹿児島県日置市「妙円寺詣り」の事例——
優秀論文	卒業論文名
水野 景子 (清水裕士ゼミ)	人はなぜ罰が存在している公共財ゲームにおいて非協力をするのか ——確率的に罰がある状況での非協力と損失の確率価値割引——
宇井 堅登 (今井信雄ゼミ)	認知症患者と社会との繋がり ——認知症カフェを通じて——
山川 姫加 (阿部潔ゼミ)	ナショナリズムとアスリートの「物語化」
上記以外の推薦論文	卒業論文名
久米 菜月 (鈴木謙介ゼミ)	ファン活動が〈政治〉に出会うとき ——BTS「Tシャツ騒動」をめぐる ARMY たちの葛藤——
栗原 万里奈 (村田泰子ゼミ)	「介助のフレーム」と「ジェンダー化されたケアのフレーム」がぶつかり合う とき女性介助者はどのように介助を行うのか ——重度訪問介護の介助者経験をもとに——
石倉 柚季 村上 早紀 (吉田寿夫ゼミ)	「女子力」とは？ ——「女らしさ」および「人間力」との関係・異同に着目して——
吉宮 遥香 (横田伸子ゼミ)	福井県の女性就労の実態と女性活躍の展望 ——「福井モデル」は地域再生モデルたりうるか——
池田 菜央 (稲増一憲ゼミ)	アイデンティティの在り処 ——「本当の私」にこだわるのはなぜか——